秀賞

生きる

山形県尾花沢市立玉野中学校
三年　菅野友葵

「お父さんが帰ってきたよ。」

六月十一日の夕方頃、母はそう言った。最初は一時帰宅だと思った。いや、そうであってほしいと願った。しかし父はぴくりとも動かなかった。全てを悟った私の頬を、一筋の涙が伝った。

背中の神経に腫瘍が見つかったのは九年前のことだった。父は悪性リンパ腫と診断された。その時は数ヶ月入院したが、治療により無事に回復。会社にも復帰した。

ところがその六年後、がんが再発した。それからは入退院の繰り返しだったが、父はいつも前向きに病気と闘っていた。

そして去年の七月、同種造血幹細胞移植という血液の移植手術を受けた。医師によるとこの手術を受ければ0パーセントではないが、がんが再発する可能性はほぼなくなるということだった。それを聞いた私はとても安心した。もう父はがんで苦しまずに済むと思ったから。

ところが事態は一転した。手術は成功したのだが、十二月にがんは再発してしまった。本当にショックだった。多分、父が一番ショックだったかもしれない。でも父は、そんな素振りを見せずいつも明るかった。そして、がんは首の大事な神経のところに再発したため、その影響が出始めた。右手が痺れてきたのだ。それでも父は仕事を続け、病気と必死に闘った。首の痛みも増してきて、とても辛そうだった。

そして、今年の四月から六月まで、父は入院生活を送った。病状は悪化しており、放射線治療などを行ったが、ついに手足が麻痺してしまった。それでも父はリハビリに励んでいた。私は父の手足が麻痺してから、仏様に毎日願った。「父の手足が動きますように。病気が早く治りますように」と。たまに忘れることもあったが、奇跡が起こるようにと一生懸命祈った。

亡くなる一週間前、父の血圧が急に下がった。だから家族みんなでお見舞いに行った。その頃の父はベッドに寝たきりの状態で、喋るのも辛そうだった。私は自然と涙が出てきた。みんなも泣いていたし、父も泣いていた。

思えば、父はとても前向きな人だった。だから、もう家族と暮らせるかわからないという悔しさ、子供の成長を見届けられないという悔しさ、これからやりたいこともたくさんあっただろう。そんないろんな思いが混じった涙だったのではないかと私は思う。

輸血をした結果、なんとか血圧は正常値に戻り、家族はみんなほっと一安心した。その日は食欲も回復し、ご飯も食べた。けれどやはり、食欲は少しずつ落ちていき、最後のほうはアイスなどを食べていたそうだ。こんなに辛い状況でも、生きる希望を捨てずに頑張って食事をする父はすごいと思った。

そして六月十一日、父は天国へと旅立った。安らかに眠っている父を見て、涙があふれて止まらなかった。

父が私にとっていかに大きな存在だったか、失ってから初めて気がついた。浮かんでくる思い出の数々……。それから何気ない毎日がこんなに尊いものだったということ。それらをこの経験から学ぶことができた。

「生きる」とはどういうことなのだろう。ただ息をして人間の姿、形があるだけなのか。否、私は「希望」と「目標」を持つことだと思う。

希望とは、人生を歩んでいくための光だと思う。真っ暗な道を歩くには自分で光を灯さなければならない。もしもその光がなかったら、人は暗闇の中を恐怖心を持ちながら進むことになる。だから希望を持つことはとても大切なのだ。そうすれば、苦しい時でも目の前の問題を解決しながら、力強く前進することができると思う。

それから、目標を持つことで人生が充実すると思う。けれど、目標を持つだけでなくそれを達成するための努力も必要だ。そうやって努力して目標を達成した時、自分に自信がもてる。そうすることで、人はよりよい自分をさらに目指すようになり、「生きること」の質を高められるのではないだろうか。

父は闘病生活が長く、看護師さんたちの支えもあって乗り越えることができたと言っていたそうだ。私も面会に行く機会が多かったので、そんな看護師さんたちの姿をよく目にしてきた。私の将来の夢は看護師になることだが、今回の経験を通してその思いがよりいっそう強まった。だから私も父が言っていたような、患者さんの気持ちに寄り添える、そんな看護師になりたい。

生前、父が最後に遺してくれた言葉、

「自分がやりたいことをやって、自分の思った道を歩め。」

この言葉を胸に、私は生きていきたい。

作文を書くに当たって

最初は自分の気持ちを整理するつもりで書いた作文でしたが、書き進めていくうちに生きるとは何か、という疑問が生まれました。哲学的かつ漠然とした疑問であり、深く考えさせられました。それについてはまだ答えを見つけることはできません。だから、これからも考え続けながら自分の道を見つめ直していきたいと思います。